瀬戸内海の直島・豊島・犬島における アートプロジェクトの変遷と課題

研究代表者：上村 真以
共同研究者：片山 拓哉　小村 実央　手原 愛見　林 さつき
樋口 千恵子　堀部 ひろこ　持丸 可奈子
元井 朱美　山崎 直人　山根 佳士　米本 圭佑

１．はじめに
２．直島・豊島・犬島アートプロジェクトの変遷
３．アートの魅力と課題
４．ヒアリングの結果
５．まとめ

１．はじめに

本共同研究の目的は近年、地域起こしの手法の一つとして注目されているアートプロジェクトについて、瀬戸内海の直島・豊島・犬島の事例に注目し、その変遷を辿り、現在と今後の課題を考察するものである。

近年、多様な運営主体により、それぞれの目的・内容を持ったアートプロジェクトが多数開催されている。瀬戸内海の島々を舞台にするアートプロジェクトには、1992 年のベネッセハウス、98 年から開始された家プロジェクト、2004 年の地中美術館、09 年の直島銭湯など、アートの島ベネッセアートサイト直島が創造されてきた。一方、2010 年以降、瀬戸内国際芸術祭が 3 年毎に開催されている。20 年以上に及ぶ活動の結果、直島への来訪者数は 04 年から大きく増加し、08 年には 34 万人を超えている。瀬戸内国際芸術祭へは 10 年第 1 回目は 90 万人、13 年第 2 回目は 107 万人もの来訪者が集まった。プロジェクトは、高齢化・過疎化により活力を失いつつある島々に、アートを媒介とした探訪や交流、アート制作への参加や体験の輪が広がることで、交流人口を増やし、島々の地域住民に活気をもたらした。島の伝統文化や美しい自然を生かした現代アートは瀬戸内海の魅力を照らしだし、その再発見を来訪者に促している。

しかし、プロジェクトによる影響は決してよいものばかりではない。現在、島々の住民から徐々に不満が噴き出してきている。過剰利用による平穏な生活の攪乱、船便に乗れない積み残し、アート制作による自然破壊と景観破壊、伝統的町並みへの飲食店進出などである。会場となるそれぞれの島は社会的、経済的、文化的に背景が異なるが、来訪者数が増えることでコミュニティや景観を破壊する店舗や宿泊施設が建設される商業主義も危惧される。豊島は史上最大の産業廃棄物違法投棄地であったが、美しいアートの島が定着すればするほど、環境保全の住民運動が忘れ去られようとしている。また、犬島は住民約 50 人のひなびた島であったが、大都会のショーウィンドウのような作品が生まれ、住民はとまどっている。

研究の方法としては、アートプロジェクトの変遷を整理し、主催者側、島民側、来訪者側

の観点から、直島、豊島、犬島における現地調査とヒアリングを行うものであるが、調査研究結果が奈良県で展開するアートプロジェクトに応用できないかも考えるものである。

２．直島・豊島・犬島アートプロジェクトの変遷

直島は、人口 3174 人（2014 年）で、過疎化・高齢化が急速に進行している瀬戸内海の離島である。1917 年、三菱金属鉱業（現三菱マテリアル）直島製錬所が設立され、急速な発展を遂げた。この精錬所は周囲を禿山にするなど、一時期大気汚染の元凶であったが、2003 年に豊島の産業廃棄物の中間処理施設として香川県直島環境センターを設置し、環境産業の先進地として蘇った。豊島は 1990 年に産業廃棄物の違法投棄事件として摘発された島であり、その処理対象量は廃棄物により汚染された土壌も含め、91 万 9 千トンにものぼる。しかし、今では、この瀬戸内海の直島に有数の現代アートが展開され、世界中に発信されている。そこに至る過程を次に述べていく。

1985 年、「瀬戸内海の島に世界中の子供たちが集える場を作りたい」との思いを抱いていた福武書店（現ベネッセ・コーポレーション）の創業者福武哲彦と、「直島の南側一体を清潔で教育的な文化エリアとして開発したい」との夢を描いていた当時の直島町長三宅親連が会談し、直島南部に教育文化施設による開発を約束する[1)]。しかし、86 年に、福武は急逝し、息子の福武總一郎（前ベネッセ・ホールディングス取締役会長）が福武書店を継ぐ。87 年、直島南部の土地 165 ヘクタールを取得し、２年後の 89 年に安藤忠雄の監修を受けた「直島国際キャンプ場」を開設した。88 年に、福武は、現代アートの美術館とホテルを中核として、キャンプ場、海水浴場、児童図書館などからなる直島文化村構想を発表する。92 年には現代アートの展示スペースとホテル客室を備えた「ベネッセハウス」を開館し、展示スペースにて「直島コンテンポラリーアートミュージアム」という名称でアート活動が開始され、95 年に、ベネッセハウス宿泊専用棟「オーバル」が完成する。そして、96 年から、アーティストが直島でしか見られない作品をベネッセハウス内外に制作し、それを永久展示するサイトスペシフィック・ワークスを展開するようになる。98 年には、サイトスペシフィック・ワークスを発展させた「家プロジェクト」の１件目の「角屋」、続けてその後 2002 年にかけて「南寺」「きんざ」「護王神社」が完成した。01 年に、直島コンテンポラリーアートミュージアム開館 10 周年記念企画として「スタンダード展」が開催される。04 年より、直島におけるベネッセの活動の総称として「ベネッセアートサイト直島」という名称を導入する。さらに、アートと建築が調和した、地中美術館が開館する。06 年、「スタンダード 2」展が開催され、翌年に家プロジェクトの第２期として「はいしゃ」「碁会所」「石橋」が追加される。また、08 年に、直島でのアート活動を礎に、犬島（岡山県）にて犬島アートプロジェクトを開始し、その第１期として、「精錬所」を公開する。09 年には、実際に入浴できる美術施設「Ｉ♥湯」が営業を開始する。10 年、瀬戸内国際芸術祭 2010（以下、国際芸術祭という）が開催される。そのプレオープンとして、直島に「李禹煥美術館」が、豊島に「豊島美術館」とクリスチャン・ボルタンスキーの「心臓音のアーカイブ」が建設された。さらに、犬島「家プロジェクト」が開始され、「F 邸」「S 邸」「I 邸」の３つのギャラリーと、「中の谷東屋」が公開された。

３．アートの魅力と課題

（１）直島－１

直島のアートは､大きく分けて二つある。家プロジェクトと地中美術館である。家プロジェクトとは、橋本の言葉を借りると「古い家屋を改修・改築する」ものである[2)]。また、地中美術館は、クロード・モネ（以下モネ）やジェームズ・タレル、ウォルター・デ・マリアの作品が飾られており、非常に貴重で他では見ることのできない作品が飾られている。さらに、建物自体も一風変わっており、設計は安藤忠雄が行い、建物の大半が地下に埋設されているにも関わらず、年中自然光が降り注ぐようになっている。

さて、そんな直島のアートの魅力はと言えば、二つ挙げられる。一つ目は、地域の人の暮らしの中にアートが溶け込み、存在するということである。そのため、フェリーで直島に上陸し、家プロジェクトを回るべく島の中を歩けば、表札から違う。そもそも表札なのかも謎なのだが、目を向ければ至るところにアートを感じることができる。瀬戸内海沿いの浜辺にあった黄色のかぼちゃ型のオブジェの近くには、廃材で作ったタワーのような遊び心あふれるものがあった。また、その他にも、ゴミ箱に謎のメッセージと空き缶で作った可愛らしいものがある等、挙げていけばキリがない。このように、遊び心あふれる施しがところどころで見られた。もう一つの魅力は、自然との融合である。地中美術館に入る前には駐車場から続く短い道があるのだが、そこも工夫がなされており、館内で展示されているモネの「蓮」の絵のような美しい光景と、雰囲気のある自然に彩られていた。さらに、先にも述べたように地中美術館は自然光でのみ館内を照らしているため、ここにも自然との調和がみられる。他にも、海沿いの黄色いかぼちゃ型のオブジェは、良く晴れた日の穏やかな瀬戸内海の青を引き立てる。そのコントラストが美しい。そう思えるような鮮やかな黄色が使われている。これらはやはり、自然ありきのアートといえるのだ。

では、そういったアートの今後の課題とは何だろうか。これも二点ある。一つは、アートから関連して生じる問題への対処である。例えば、これはヒアリングの際にも聞いたことであるが､アートを楽しむため観光客が増えれば､地域住民がバスを使いにくくなってしまう。利用者が増えれば、それだけ乗れなくなるのだ。これは臨時でバスの便を増やすなど、住民への配慮が必要である。もう一つは、アートのあり方である。アートが地域に溶け込みすぎると、例えば家プロジェクトなどでは、外観で区別しにくいが故、普通に住民が住んでいる家もアートになっているのかと､間違えて足を踏み入れてしまいそうになる。また､全てアートだからと､あちらこちらに変わった施しがされてしまえば､アートの境目が分からなくなってしまう。これはアートとそうでないものの境目をはっきりと明確に示すのが最善である。そうすることで今後も住民とアートの共存が可能になるのだ。

（２）直島－２

今回訪れた直島では、数々のアートをあちこちで目の当たりにした。その内のひとつに家プロジェクトがある。家プロジェクトとは、直島･本村地区において展開するアートプロジェクトである。宮島達男による｢角屋｣(1998年)に始まったこのプロジェクトは､現在､｢角屋｣｢南寺｣｢きんざ｣｢護王神社｣｢石橋｣｢碁会所｣｢はいしゃ｣の７軒が公開されている[3)]。改修された古民家に、アーティストが空間そのものを作品化し、永久的に展示している。それらの作品はかつて家屋で営まれていた生活や様子が生かされており、そこでしか生まれない独特

のものとなっている。例えば宮島達男が手がけた「角屋」は200年ほど前の家屋を改修した家プロジェクトの第1弾である[4)]。家屋の中に入ると薄暗く、水面になっている床にはたくさんのLEDのデジタルカウンターが散らばって浮いており、1から9までの数字を刻んでいる。このカウンターは、この場所・地域の人々の生を表現したものである。刻みの速さは統一されたものではなく、ゆっくり刻むものもあれば、目まぐるしく刻むものもある。そんな様々な刻みが暗い部屋の中でLEDの光を放っている。この民家で生活が営まれていたこと、そして様々な人がこの島でそれぞれの生活を歩んでいたことを改めて認識させられるような作品となっている。

家プロジェクトの他、直島のアートとして大きな存在となっているものに、地中美術館が挙げられる。安藤忠雄によって設計されたこの美術館は、その名の通り直島の外観を損なわないよう大半が地中に埋設されている。建築物に主に使われている素材は、コンクリート、鉄、ガラス、木といったシンプルなものとなっている。廊下の傾斜など綿密に計算された建物からは光が入り、時間の経過とともに様々な表情を見せる。建物そのものがアートであることを感じさせる美術館である。そんな美術館には睡蓮を描いたクロード・モネ、空間を作品に変えたウォルター・デ・マリア、光そのものをアートとしたジェームズ・タレルの作品が展示されている。

家プロジェクトや地中美術館以外にも、島に展示されていた、草間彌生の「南瓜」「赤かぼちゃ」（写真－1）が印象的である。赤や黄色の大きなかぼちゃが島にどっしりと置かれており、存在感を感じさせるものであった。しかし、不思議と直島の周りの自然に馴染んでいるように感じられた。記憶に残っているのはかぼちゃだけではなく、かぼちゃとその風景だった。それらをまとめて作品として認識しているような感覚もある。このように、直島には多くのアートが存在し、アートが土地と結びついていることがわかった。

写真－１　「赤かぼちゃ」

写真－２　豊島の棚田

写真－３　チケット売り場から

（3）豊島

豊島の中では豊島美術館が印象的であった。豊島美術館の面する下り車線の道路から臨む景色は、棚田と海の両方が楽しめる、まさに絶景だった。道路の横に山からの斜面に沿って作られた大きな棚田があり、その棚田が下りていく先に海があるといった具合だ。棚田よりも奥のほうで、海の沖へ突き出した岬があり、それらの眺めは今までに見た海の景色の中で最も美しいと感じた。（写真－2）　天気に恵まれたこともあるが、豊島美術館のチケット売場から見た景色は光と影のコントラストがとても美しく、そこから切り取る景色もまた素晴らしかった。（写真－3）

チケット売り場から美術館入口まで続く白い小道は

青々とした夏の植物のなかにあるので、それがいっそうお互いの色を引き立てあっているように思えた。美術館となっている大きな白いドーム型の建造物は、自然の中に突如として現れるには少々異様な外観であると感じた。（写真－４）　白い小道は美術館の入り口付近になると林の中を通っており、その先に小さなトンネルのような美術館の入り口があった。入り口付近から撮影が不可能になるので写真はないが、白い大きなドームからのびている形状がアニメのドラえもんが使う道具に似ていて未来的な印象を受けた。

写真－４　美術館への通路

豊島美術館はアーティスト・内藤礼と建築家・西沢立衛の作品で、建造物は広さ 40 × 60 m、最高高さ 4.5 mの空間に柱が１本もないコンクリート・シェル構造だ。天井には２か所の開口部があり、そこから風の流れや音、光を取り込んでいる。開口部の両端には細い糸のようなものが渡されていて、風の動きが見て取れる。平坦に感じられる床の中には無数に水がわき出る場所があり、そこから生まれた水滴が開口部の真下に向かって流れていくような構造だ。床は水を弾く性質のコンクリートであるので、水滴の動きもまた鮮明に見ることができる。ゆっくりと流れていく水滴がまた別の水滴に合流するさまは、人の動きにも似ていると感じた。コンクリートに囲まれた空間なので美術館の中の空気はひんやりしているがとてもゆったりしていて、何時間でもそこにいられるような気がしてくる。開口部から見える木々や空の眺めを切り取ることで、より一層豊島の豊かな自然を強調しているようにも感じた。自然の中に突如として現れるコンクリートの建物は人工物と自然のコントラストを生み出し、普段は気にも留めない自然の表情を伝えているのではないかと考えた。

（４）犬島

犬島で見たアートプロジェクトは、犬島精錬所美術館と犬島「家プロジェクト」の二つである。これらは、すでにそこにあるものを最大限に活用し新たな展示空間を作り上げていた。犬島精練所美術館は銅精錬所として実際に操業されていた犬島精練所を活用した美術館であり、「遺産」「建築」「環境」「アート」の四つの要素により構成されている。銅の製錬過程で発生する鉱滓から作られたカラミ煉瓦造りの工場跡や煙突など、犬島にはかつての大規模な精錬事業を彷彿とさせる遺構が数多く残されていた。これらは 2007 年に経済産業省から「近代化産業遺産群」の認定を受けている。建築家の三分一博志は、この近代化産業遺産を活用し設計した。カラミ煉瓦や煙突に加え、太陽熱や地中熱などの自然エネルギー、島の地形、犬島由来の花崗岩である犬島石を利用し、空気を夏には冷却し冬には温めるという構造を作りあげた。館内の温度を一定に保ち快適な空間を作りながら、周囲の環境にできるだけ負荷を与えないような配慮がされているのである。館内にはアーティストの柳幸典によるアート作品「ヒーロー乾電池」が設置されている。素材には犬島から採れる石、銅精錬の副産物であるスラグ、そして作家の三島由紀夫の住んでいた家の部材が使われている。高度経済成長期に生き、日本の近代化に警鐘を鳴らした三島と、近代化の開幕の象徴であった精錬所とが合わさりあって、強いメッセージが発せられていた。

犬島「家プロジェクト」は、アーティスティックディレクターの長谷川祐子と建築家の妹島和世により犬島の集落の中に展開されているプロジェクトである。「Ｆ邸」「Ｓ邸」「Ｉ邸」「Ａ

邸」「Ｃ邸」の五つのギャラリーと「石職人の家跡」「中の谷東屋」が集落の中に置かれ、作品が公開されている。このプロジェクトでは、鑑賞する人と作品と島の風景が一体となることを重視している。ギャラリーは空き家や空き地を活用し、素材にはかつての民家の瓦屋根や古材などを用いている。また、風景を遮らない透明なアクリルや周囲の風景を映し出すアルミなどの素材も使われており、風景を意識して作られていることを感じることができた。

このように、すでにあるものを意識して新たな展示空間が創出されており、周囲の環境によく馴染むような形でアートプロジェクトが展開されていた。しかし、馴染みすぎているがために弊害も生まれてしまっていると感じた。島民の生活空間と展示空間との境界線の曖昧さである。観光客はギャラリーを鑑賞するために集落の中を移動し、民家のすぐそばでアートを楽しむことになる。島とアートが一体となっていることが魅力になると同時に、島民の生活空間を観光客が侵害することになってしまっているのではないかと考える。

４．ヒアリングの結果

アートの仕掛け人であり、瀬戸内国際芸術祭の主催者である福武財団の広報マーケティング担当のＴ氏と主催者香川県の芸術祭を担当したＴ氏に住民とのかかわり方、芸術祭のあり方についてお話を伺い、さらに、男木島のＣ氏と豊島在住のＢ氏には、住民の視点から芸術祭による地域及び住民への影響や住民のかかわり方についてヒアリングを行った。

（１）福武財団のＴ氏

アート活動が住民に受けいれられるためにどのように関わっているのかについて「20 数年前から、慎重に進め、地域の人が笑顔をつくることから一つ一つの積み重ねで行っている。例えば古民家を手放す人がいれば、今後の活用の仕方を相手側と財団で話し合い、意向を確認し、地域づくりに生かせるようにする。普段の付き合いが大事で、きちんとした話をするのではなく、立ち話や食事中に出るエピソードなどを大切にしている。自分で見たこと聞いたことが大事で、そのような会話を財団に持ち帰りスタッフで共有する。気持ちの変化を拾い、アートが人の人生の何かのきっかけや場所になって欲しい。スタッフは仕事と生活は一緒で財団自体が島民になることをこころがけている。」

写真－５　福武財団ヒアリング

（２）香川県のＴ氏

芸術祭の開催趣旨とその目的について「芸術祭は継続して開催することでより地域の活性化を継続できるものであり、単発のイベントで終わらせては意味がない。開催の効果はどうしても行政として来場者数や経済効果の額などを数字で表さなければならないが、本当の効果は地域の方々が肌で感じる部分であり、我々が島に入って、島民から直接、伺った話が評価されるべきものである。」また、「2 回の芸術祭の成果として県民は今まで行かなかった島に行き、知らなかった県を知ることになり、島の住民は来訪者によって島の良さに気付かされたことが挙げられる。」

（3）男木島のC氏

芸術祭について、「芸術祭は本土側の目線になっている。経済効果は高松側のみで、島にはない。大騒ぎになるだけで大半の住民にはメリットがない。例えば、住民や働いている人が船に乗れなかったりした。また、芸術祭には島にレトロを感じて来るが、島にある男木島灯台などの島の文化が活かされていない。島の文化はバブルの時にも土地を売らずに守ってきた。芸術祭も島や島民本位で行ってほしい。地域振興や島民のための芸術祭になっていない。島民の半分くらいが喜ぶ仕組みづくりが必要だと思う。」

（4）豊島在住のB氏

芸術祭について、「豊島では芸術祭を推進する人は少ない。8割はどうでもいい。ただ、昔から島民はすべて平等で公平であり、“集落の中でも表立つことはしない”という生活をしていく上での暗黙の慣わしなどがあり、芸術祭で問題があっても意見は言わない。島の自治会は、観光協会という名の下、芸術祭にシフトしている。経済効果は少なく、地域振興になっていない。香川県や福武財団は島の資源にはお金を使わない。島の資源を維持するためには、産業を作り、島全体が良くなるようになればいい。若い人が移住しても仕事がない。芸術祭2016年のテーマは〈食〉であり、地元にしかない食文化を掘り起こす必要がある。準備は早く始めないといけない。」

5．まとめ

瀬戸内海のアートプロジェクトについて、文献調査と現地調査を行った。実際に現地調査を行い、作品とその周辺環境を直接みることで、ベネッセがアートサイトを展開するにあたって合言葉としていた『あるものを生かして、ないものを創る』がよくあらわれていると感じた。地元の新聞記事の世論調査の「再生に役立った8割　次回開催7割超が望む」の見出しからもわかるように[5)]、瀬戸内国際芸術祭から地域の話題や活気が生まれ、芸術祭の運営ボランティア「こえび隊」のような島外ボランティアと島民との交流も生まれている。しかし、ヒアリングを行った結果から、それぞれの島の固有性は大きいが、芸術祭の作品には「その土地不在」に感じるものがあるとの声も聞いた。今後の芸術祭では、より土地の気候や文化、風習を学び共有しなければならない。「誰のための芸術祭なのか」を考えなおすことが、これからの芸術祭をよりよいものとするために必要である。全体が良くならないとよりよいものにはならない。そのためには島民と島の自然環境を第一に考えることが重要である。その上で芸術との融合を目指さなければならない。地域や社会に及ぼすインパクトは良いものと悪いものの両方が存在する。前者を大きくし、後者を小さくするためには住民との融合と協働にむけて、多くの人々の前では意見できない人のために、島民へのアンケートによる聞き取り調査や電話での応答など、話し合いだけでない、より細かい「交流」が必要だろう。島とアートの融合が、さらに深みを増し、芸術祭が回を重ねるごとに、新たな発見や新鮮な感動を与えてくれることを心から期待したい。

引用・参考文献等

1）ベネッセアートサイト直島公式ホームページ　http://www.benesse-artsite.jp/ 2014.12.15 アクセス
2）橋本忠和 2012『日本における環境芸術と地域社会の関係性の変遷に関する一考察：彫刻設置事業とアート・プロジェクトを手がかりに』環境芸術学会論文集 11 号、p71-79
3）家プロジェクト｜直島｜ベネッセアートサイト直島　http://www.benesse-artsite.jp/arthouse/　2014.12.26 最終アクセス
4）Setouchi Toriennale ／アート作品／家プロジェクト／「角屋」 http://setouchi-artfest.jp/artwork/a004　2014.12.26 最終アクセス
5）朝日新聞香川版「瀬戸内国際芸術祭　県政世論調査」2014.12.30 付け
6）西田正憲 2011『自然の風景論　自然をめぐるまなざしと表象』清水弘文堂書房
7）直島町ホームページ　http://www.town.naoshima.lg.jp/　2014.12.26 最終アクセス
8）豊島問題－香川県ホームページ　http://www.pref.kagawa.jp/haitai/teshima/　2014.12.1 アクセス